

HTLV-I母子感染予防対策

班長

一條元彦

HTLV-Iキャリア妊婦より出生した児について母児感染の実態を調査し、これにもとづき予防対策を検討した。そのさい重要な留意事項として以下の各項が合意された。

1. HTLV-Iキャリアの検索については、IF法、WB法、PCR法などの確認試験を実施し、真のキャリアの決定について充分注意を払うよう留意することとした。なお、EIAキットを使用するときは cut off index 5.0 以上を陽性とし、また inhibition EIAキットを使用するときは吸収率 70 % 以上をもって陽性とするれば、結果はIF法と一致する。
2. HTLV-Iキャリアより出生した児については、子宮内感染の有無について検討し、妊娠期間中に母子感染を生起するような異常妊娠状態になった妊婦については特に注意することとした。
3. キャリアより出生した児については生後 6か月ごとに採血し、抗原・抗体を検索し感染実態を調査する。一方、授乳方法はキャリアの意志に任せるが、授乳方法（母乳、人工乳、凍結母乳、熱処理母乳）の別を明確にし、それぞれの場合の検討することとした。
4. HTLV-I感染における抗体産生について重要な問題が指摘されている。すなわち、HTLV-I感染が新生児期に成立した場合、抗体産生が認められないことがあり、このような状態は動物実験におけるHTLV-I感染でも確認されている。かかる抗体陰性の児はどのような機序で抗体産生が見られないのかについて検討を加えることとした。

このような作業計画のもとに3年間で約 500 名のHTLV-Iキャリア妊婦よりの出生児が母子感染の調査対象として登録されることになるが、当初今年度は 300余名の児が登録された。その中、

奈良医科大学の登録例 153 名については、子宮内感染を疑うもの 2 %、母乳感染と考えられるものの 77 %という成績が得られた。

HTLV-I 感染の予防対策として胎内感染は予防の方策は無く、母乳感染は母乳哺育を中止して人工乳哺育にすれば防止出来るが、母乳中止は児にとってデメリットとなることを配慮しなければならない。

したがって、

- ①母乳を期間・量等、ある条件下で与える。
- ② -20° C、12時間凍結処理した母乳を与える。
- ③ 56° C、30分間熱処理した母乳を与える。

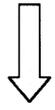
などの条件付き母乳哺育法を検討した。

①については母乳哺育の安全域が存在することが前提となるが、今日、なお統一見解が得られていないと判断された。

②については奈良医科大学では 41 名に試みて、そのうち 21 名が生後 12か月以上に達したが HTLV-I 感染児の発生を見ていない。しかし今後多数例の検討が必要であろう。

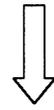
③については未だ臨床データに接していない。

何れにせよ、これらについての真の安全性は今後の継続検討によって判定したいと考える。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 63 年度厚生省成人 T 細胞白血病(ATL)の母子感染防止に関する研究

HTLV 円母子感染予防対策

班長一條元彦

HTLV-1 キャリア妊婦より出生した児について母児感染の実態を調査し、これにもとづき予防対策を検討した。そのさい重要な留意事項として以下の各項が合意された。

1. HTLV-1 キャリアの検索については、IF 法、WB 法、PCR 法などの確認試験を実施し、真のキャリアの決定について充分注意を払うよう留意することとした。なお、EIA キットを使用するときは cut index 5.0 以上を陽性とし、また inhibitionEIA キットを使用するときは吸収率 70%以上をもって陽性とするれば、結果は IF 法と一致する。

2. HTLV-1 キャリアより出生した児については、子宮内感染の有無について検討し、妊娠期間中に母子感染を生起するような異常妊娠状態になった妊婦については特に注意することとした。

3. キャリアより出生した児については生後 6 か月ごとに採血し、抗原・抗体を検索し感染実態を調査する。一方、授乳方法はキャリアの意志に任せるが、授乳方法(母乳、人工乳、凍結母乳、熱処理母乳)の別を明確にし、それぞれの場合の検討することとした。

4. HTLV-1 感染における抗体産生について重要な問題が指摘されている。すなわち、HTLV-1 感染が新生児期に成立した場合、抗体産生が認められないことがあり、このような状態は動物実験における HTLV-1 感染でも確認されている。かかる抗体陰性の児はどのような機序で抗体産生が見られないのかについて検討を加えることとした。

このような作業計画のもとに 3 年間で約 500 名の HTLV-1 キャリア妊婦よりの出生児が母子感染の調査対象として登録されることになるが、当初今年度は 300 余名の児が登録された。その中、奈良医科大学の登録例 153 名については、子宮内感染を疑うもの 2%、母乳感染と考えられるもの 77%という成績が得られた。

HTLV-1 感染の予防対策として胎内感染は予防の方策は無く、母乳感染は母乳哺育を中止して人工乳哺育にすれば防止出来るが、母乳中止は児にとってデメリットとなることを配慮しなければならない。

したがって、

母乳を期間・量等、ある条件下で与える。

-20℃、12 時間凍結処理した母乳を与える。

56℃、30 分間熱処理した母乳を与える。

などの条件付き母乳哺育法を検討した。

については母乳哺育の安全域が存在することが前提となるが、今日、なお統一見解が得

られていないと判断された。

については奈良医科大学では41名に試みて、そのうち21名が生後12ヵ月以上に達したがHTLV-1感染児の発生を見ていない。しかし今後多数例の検討が必要であろう。

については未だ臨床データに接していない。

何れにせよ、これらについての真の安全性は今後の継続検討によって判定したいと考える。